

集検喀痰細胞診における肺末梢型扁平上皮癌の成績と腫瘍径 2cm 以下の細胞像について

(財)福島県保健衛生協会¹⁾、

公立学校法人福島県立医科大学医学部呼吸器内科学講座²⁾／附属病院臨床腫瘍センター³⁾

○室井祥江(CT)¹⁾、佐藤丈晴(CT)¹⁾、神尾淳子(CT)¹⁾、柴田眞一(CT)¹⁾

石田卓(MD)^{1,2,3)}

【背景と目的】近年、検診で発見される肺末梢型扁平上皮癌が増加しているといわれている。今回、当協会の成績でも同様の傾向があるかを検討した。また、小型肺末梢型扁平上皮癌について、その細胞像の特徴をまとめたので報告する。

【対象と方法】平成8年度から21年度までの14年間に、住民検診で喀痰細胞診を行った受診者、延べ120,022名中159例(10万対比134.8)に原発性肺癌が発見された。今回はこれら肺癌患者を検診実施時期により前期と後期、それぞれ7年間ずつに分け、比較検討した。さらに、肺末梢型扁平上皮癌の中で腫瘍径が2cm以下であり、手術材料等を入手しえた10症例について、高度異型細胞の出現数、大きさ、形態等について観察した。

【結果とまとめ】原発性肺癌(10万対比)は、前期93例(138.1)、後期66例(130.4)であった。組織型別内訳では扁平上皮癌(10万対比)が前期67例(99.5)、後期40例(79.0)、腺癌(10万対比)は前期15例(22.3)、後期11例(21.7)であった。扁平上皮癌の発生部位は、肺門型／肺末梢型／調査不能が、それぞれ前期で55.2％／28.4％／16.4％、後期では32.5％／62.5％／5.0％であった。このように前期は肺門型扁平上皮癌が半数以上を占めていたが、後期では肺末梢型の割合が高かった。

肺末梢型の中で、腫瘍径が2cm以下の症例は、前期8例(42.1%)、後期8例(32.0%)であった。検討しえた10症例の集検時細胞像は、炎症性背景の中、OG好性小型または中型類円形で、細胞質が厚く、光輝性を有する細胞や大型不整形で、核クロマチンが増量した細胞像を呈していた。